



今を生きる社会人たちは、キャリアという大きな海を
どんな船に乗って航海しているのだろう。
港に立ち寄るさまざまな社会人たちの船=仕事から、
これからの仕事・働き方へのヒントを探ります。

「カッコよくて、稼げて、革新的」な
漁業を目指して

一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン漁業2課チームリーダー、赤貝漁師見習い **渡部更夢** わたなべ さらむ

1995年秋田県生まれ。千葉大学卒業後、大学院で三陸とイタリアの漁村留学を経験。
2021年フィッシャーマン・ジャパンに入社。「新3K(カッコいい、稼げる、革新的)な水産業」実現のため、漁業の人材確保・育成に取り組む。
赤貝漁師の修業をしながら、論文執筆も継続。風の日には漁に出て、海が荒れた日はサーフィンをしている。

取材・文／今井夕華 撮影／竹内弘真

渡部更夢さんのお仕事について

① 一番のやりがい

生命活動に不可欠な「食」の産業に貢献できること。変化の先駆けとなる事例がつかれること。

② 一番大変なこと

FJの業務は調整ごとが多いので「変化すること」のスピード感をコントロールできないこと。

③ こんな人におすすめ

自分とは違う人のさまざまな価値観に触れるのが好きな人。変化を楽しめる人。

海と向き合い続ける姿勢に
感銘を受ける

宮城県石巻市に拠点を置くフィッシュヤーマン・ジャパン（FJ）は、漁業のイメージを「カッコよくて、稼げて、革新的」な「新3K」に変えるべく活動している団体だ。渡部さんは、大学時代のインターンで関わるようになり、現在はフルタイムでFJで働きながら、週3日ほどは赤貝漁師の見習いとして海に出ている。

「バックパックで海外を巡ったり、留学でイタリアのファノという漁村にも行きましたが、やっぱり日本の水産業って面白いなと思ったんです。船に乗る漁師さんは単純にカッコよかったですし、震災があってもまだ海と向き合い続ける姿勢は本当にすごい。その思想や哲学を、深く知りながら、次世代の水産業を模索したいと考

えて就職を決めました」

ミクロとマクロの視点を
行き来しながら働く

FJの業務では、漁業にまつわる雇用や人材不足の支援を担当している。

「昔ながらの漁師さんだと、そもそも求人を出したことがなかったり『来てダメだったら辞めさせればいいでしょ』と考えている人もいました。だけど、今の時代それだと続かないですよ。漁師さんたちに対して『みんなで若手を育てる』という意識づけをしたり、雇用形態や給与についても見直して、長く働ける環境づくりに取り組んでいます」

FJには、高齢になった漁師さんから、後継者探しの相談も数多く寄せられる。渡部さんが修業している赤貝漁の親方、



フルタイムで働きながら、漁師見習いをしている。朝から漁に行った日は昼寝をして体力を回復。不規則な生活はすぐに慣れたそう。

平塚秀一さんもその一人。

「月に10日程度の稼働のため、フルタイム雇用は難しい。その一方で、副業でもできる漁業だと教わりました。資源さえ続けば、赤貝は単価が良いので、少ない稼働でも売上は安定します。養殖のように付きつきりで見る必要もないので、出張などFJの仕事も続けやすい。業界全体のことを考えるFJでの仕事に対して、直接現場で海のことを見る視点、どちらも行き来したかったので、絶好の機会でした」

経験を積んで
もっともっと強くなりたい

石巻の赤貝は「貝桁（かいけた）漁」という伝統的な手法で、鉄製の熊手「まんがん」を使い水揚げされる。

「岩礁などに引つかかると、まんがんが曲



代替わりを見据え、マンツーマンで親方から仕事を教えてもらう。この日は朝4時から2時間ほど船のメンテナンス。

がつてしまうので、木製のハンマーでガンガンと叩いてメンテナンスしています。石巻の海は、震災があつた影響でタイヤなども沈んでいて。引つかかるとワイヤーが切れて怪我をすることもあるんです。たくさん経験を積んで、トラブルの対応力を高め、もっともっと強くなりたいですね」

石巻に来てから「自然のなかで生かされている感覚」があると話す渡部さん。

「コロナ禍では、都会暮らしの辛さを感じました。だけどここにいれば、食材はすぐ手に入るし、満員電車に乗る必要もなく、漁のない日は海に行つてサーフィンができる。自然は思い通りにならないものですが、それでも自然と共に生きる『生産者』は強いと思うんです。今後、仕事を選ぶときの選択肢に、漁師が自然と出てくるようになったら嬉しいですね」



赤貝を採る際に使うのが、鉄製の熊手「まんがん」。岩礁などに引っかけると、木製のハンマーで叩く。